

古泉千櫨と原阿佐緒、石原純不倫恋愛事件：
原阿佐緒宛古泉千櫨未発表書簡 大正期『アラギ』裏面史(3)

千野，明日香

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

75

(開始ページ / Start Page)

17

(終了ページ / End Page)

30

(発行年 / Year)

2007-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010149>

〈論文〉

こいずみ ちかし

古泉千樫と原阿佐緒、石原純不倫恋愛事件

— 原阿佐緒宛古泉千樫未発表書簡

大正期『アララギ』裏面史 (三)

千野 明日香

はじめに

「大正期『アララギ』裏面史(二)」でふれたように、古泉千樫は同人から、石原純と原阿佐緒の仲を「とりなし……あら、ぎ同人で、又先輩であつた人の生活を、良い方から、俄に踵を廻らすやうな状態に立ち到らしたと解釈され」、大正十三年四月、文芸誌『日光』参加をきっかけに『アララギ』から追われた。大正後期『アララギ』のあり方を考えるうえで、千樫の絶縁は大きな意味を持つと思われるが、当事者の千樫を含め、島木赤彦、斎藤茂吉、平福百穂など、『アララギ』の幹部同人たちが口を閉ざしたこともあり、この間の事情は明らかにされてこなかった。

橋本徳壽の『アララギ交遊編年考三』には、大正九年六月から十二月までの、阿佐緒に宛てた千樫の書簡十通が収められて

いる。しかし最も重要な、原阿佐緒、石原純不倫恋愛報道の前夜の、大正十年一月から七月までの書簡は、これまで大林昭雄『宮城文学資料』所収の一通のみしか公刊されていなかったため、全体の経緯をたどることができなかった。

幸い、筆者は新たに宮城県の前阿佐緒記念館所蔵の、大正十年の書簡二通を含む四通の未発表書簡に目を通すことができた。本稿では、これら未発表書簡を含む十五通の書簡を通じ、千樫が阿佐緒と関係を復活させてゆく様子と、再度の別れの後、純、阿佐緒の関係にかかわること、千樫が島木赤彦、斎藤茂吉、平福百穂等『アララギ』の幹部同人たちと対立していった過程をたどってみたい。

また、稿末には、資料として、宮城県の前阿佐緒記念館所蔵の原阿佐緒宛て古泉千樫の未発表書簡二通と、『宮城文学資料』所収の一通を収録した。掲載を快諾してくださった原阿佐緒記念館と大林氏に、この場を借りてお礼申し上げる。

前史

大正三年三月以後、千櫨と阿佐緒の交りはいったん途絶える。

だが、千櫨は阿佐緒を忘れることができなかった。「独り寝」(大正三年)、「波の音」(四年)、「島の桃」(五年)、「朴の花」(六年)、「朴の芽」(七年)、「株虹」(八年)など、千櫨は阿佐緒への思いを題材とした連作を詠みつづけている。

「波の音」、「株虹」を読むと、千櫨が折りにふれ阿佐緒と一夜をともした稲毛を訪れたことが分かる。

一方、阿佐緒の人生は変転を続けた。大正三年四月、初恋の人庄子^{しゅうじ}勇と結婚。大正四年、次男保美をもうけるが、不仲により別居。同七年、離婚にいたる。

別居中の大正六年「異常妊娠」で東北帝国大学医科大学附属病院に入院した阿佐緒は、同じ『アララギ』の同人として見舞いに訪れた東北帝国大学教授石原純と知りあう。

純はしだいに阿佐緒にひかれるようになり、愛を告白する。

しかし阿佐緒は純の求愛を受けいれず、かえって、純の教え子で年下の美青年真山孝治との逢い引きを見せつけた。未遂におわったものの、大正九年三月、純は自殺を企てた。

阿佐緒の上京

大正九年六月初旬、阿佐緒は純の求愛を避けるため上京、十日ほど麻布区谷町にある親友三ヶ島蓼子の家に滞在した(注2)

書簡②。以下同。

六月中旬いったん仙台へ戻り、四か月後の十月二十一日に再び上京。このときは長期のかまえで、蓼子の家へ鏡台など家具まで運びこんだ。

女所帯の気安さもあつたにちがいない。阿佐緒の上京を知ると、千櫨はしばしば三ヶ島宅を訪れた。

十一月十四日に書かれた蓼子、阿佐緒宛のハガキ(⑥)には、「昨夜(筆者注：十三日)おそくまで失礼仕候 今夕(筆者注：十四日)一寸御寄りするつもり もしとろろ御馳走して下されば難有酒一合は御用意無用の事、もう当分のみませんから」とある。

このとき、千櫨は少なくとも二晩連続で三ヶ島宅を訪れていた。

訪問はしばしば深夜におよんだ。『定本古泉千櫨全集』「書簡にあらはれたる歌」には十二月十日付けとして、「別れ来て夜いたくおそし街かげの水れる雪をふみつづ帰る」の一首がある。阿佐緒に会いにゆけば、同居の蓼子にやっかいをかけることになる。十二月十一日付けの蓼子に宛てたハガキには、「いつもいっつもおたづねすれば夜をふかし申訳なくありがたきかも」という挨拶の歌が添えられている。

千櫨は、阿佐緒と接する機会をより多く持ちたかったようだ。十一月十六日付けの阿佐緒、蓼子宛ての手紙(⑦)で、千櫨は蓼子に「先日私は原さんに左千夫全集の校正をお願いいたしました」と報告している。自らの手がけていた『左千夫全集』の校正を阿佐緒に依頼したことが分かる。

この仕事を阿佐緒は引きうけたらしい。阿佐緒だけでなく蔑子もいっしょに手伝ったようだ。十二月十日付けの蔑子、阿佐緒宛のハガキ⁽¹⁰⁾には、「昨夜は長居失礼仕候 先日御願いたし候校正三校最早来り候 非常に丁寧に校正していただき候事今更難有存候」とあり、二人に対して感謝の気持ちを表している。

阿佐緒からも千樫に頼み事をしている。

十二月十三日付けの阿佐緒宛ての手紙⁽¹³⁾には、「行人の御歌これで結構と存候 早速鎌田君の方へ御送り被下度候」とある。千樫が阿佐緒から頼まれて、歌誌『行人』へ送る歌を添削したことが分かる。

阿佐緒との交際が復活したことは千樫の心に強い煩悶をもたらしたようだ。

たとえば、この時期に詠まれた連作「沼」^(注8)は、「この夜ごろ寝ねがてぬ夜のつづきつつ今宵も更けて眼はさえにけり」、「重き病吾れの病むかにおもほえて朝の小床に眼をあきて居り」(傍点筆者)の二首から始まる。

夜も眠れぬような悩みをかかえた作者は思いたって旅に出る。だが、まっすぐに汽車に乗ったわけではなかった。「旅行くとわれ寄りにけり起きいでし人の素顔のかなしく親し」とあるように、作者は阿佐緒らしい女性のいる家を訪れる。

上田三四二^(みよじ)は、「沼」中の一首「しづかなる心たちてしばしばも人には逢ひぬこの朝の間も」には「未練を断ちきれぬ千樫の姿」が見えるという。

「重き病」について、柴生田稔^(しばうだのり)は、「死病の肺結核の病変が

すでに起こっていた」と解釈するが、上田は、「この夜ごろ」と合わせて考えれば、実際の病気というより「心理的なものからくる疲労」であり、旅は阿佐緒への「未練の苦しさから逃れるためのものであった」と指摘^(注9)している。

蔑子との旅

この間も、純の阿佐緒への求愛は続いていた。

「三ヶ島蔑子年譜」^(注10)によると、「十二月、石原純は相対性原理講演のため京都帝国大学に招かれたが、追行する筈であった阿佐緒が約を破ったため、石原は大阪に夫(筆者注：蔑子の夫倉片寛一)を訪い懇請したので、夫はこれに応えて蔑子に対し阿佐緒を同伴すべしと打電してきた。そこで蔑子は阿佐緒をつれて西下」し、純の待つ京都三本木の旅館「信楽」に伴った。この旅行で純と阿佐緒は深い仲になった。この間の事情は「大正期『アララギ』裏面史(二)」^(注11)でふれたので、繰りかえさない。「三ヶ島蔑子年譜」には、阿佐緒を送りとどけてから、蔑子は大阪市北区梅田の水産新報社の二階にあった倉片の寓居に二週間滞在し、その後「大晦日所沢へ行く」とある。

大正九年の大晦日、倉片、蔑子夫婦は大阪から直接所沢の倉片家に帰省し、阿佐緒はひとり谷町の蔑子の家へ帰ったようだ。このときのことを、阿佐緒は「友の家に元旦の夜をひとり居り遠き子を思ひ早く寝るも」、蔑子は「わが留守の友を思ひつつふるさとの家人とあり元旦の夜を」と詠んでいる^(注12)。

千櫨との旅——「合^く飲^む木の花」の意味

関西旅行は、阿佐緒と千櫨の関係にどのような変化をもたらしたのだろうか。

一月初旬、千櫨と阿佐緒は叟子にも秘めて旅行に出ている。

阿佐緒宛て大正十年一月十九日付けの千櫨の手紙(13)は、「御らんの上は直ちに打ち破りお捨て可被下事 容易になし得られないと思はれる私共二人はかの旅を折角しながら帰りにあるなことになったのをすまないと思ひます」(傍点筆者)で始まる。

旅行の帰り道、千櫨は阿佐緒に不機嫌な顔を見せたらしい。これはそのことをあやまるため書かれた手紙である。

原因は阿佐緒と千櫨の気持ちのすれ違いだったようだ。

千櫨は「自分勝手に都合よいぬばれ」から、「あなたの全部をのぞむやうな考へまで起してゐた」という。一緒に旅行へ行くからには、千櫨はおそらく阿佐緒が自分に関心を持っていると考えていた。

ところが、阿佐緒から面と向かつて「本当のこと」を告げられ、「興奮して怒つたやうな顔を見せてしまった」という。

「本当のこと」とは何を指すのだろうか。

千櫨は、「あなたが〈京人形を我抱きて〉といふお歌を送つてくれた事も、歌集を〈合飲の花〉としたのも、その時直覺した通り今はつきりわかりました、私はただあなたの方の合飲をお祝ひすればよかつたのでせう」(傍点筆者)と書いている。

「合飲の花」とは、阿佐緒の計画していた第三歌集「合飲木の花」を指す。半年後の七月二十六日から始まった石原純との不倫恋愛報道に衝撃を受けた阿佐緒は、「合飲木の花」を「死をみつめて」に変える。「合飲木の花」の題は使われなかったが、歌集出版の構想を阿佐緒がこの一月から抱いていたことが分かる。

「合飲」は伝統的に男女の愛の成就を暗示する。関西旅行から帰った直後という時期からみて、千櫨のいう「あなたの方の合飲」とは、阿佐緒と純の愛の成就を意味すると思われる。

純への思いを打ちあけられ、千櫨は「合飲」の意味を改めて悟る。そのため傷ついて怒つた顔を見せてしまったのだろう。

大正三年三月以来の六年間の思いがそのとき断たれた。千櫨にしてみれば、無理もないことだったかもしれない。

帰り、千櫨は阿佐緒を谷町まで送りとどけている。二人は気まずい雰囲気であれたにちがいない。

不倫恋愛事件報道まで

四日後の大正十年一月二十三日、氣をとりなおした千櫨は阿佐緒に宛て、再び手紙を書く(14)。

阿佐緒の気持ちを知った千櫨は、このとき、阿佐緒が純と一緒にいることが最良の道であると確信していた。「石原氏の強い愛と大きな力とは今にあなたを、少しでもぐらついてゐるあなたの心を全くひたぶるなものにしてあなたを人間として本当によく生きさせるであらう」と、二人の前途を祝福している。

また、「石原氏の心だけを信じられるといふ」阿佐緒に、「その信じ得るといふ心を少しでもぐらつかせないようにして固くひたすらに抱き守つて行」くことを勧めている。

そして、二人の道を妨げないために、「私たちの関係を断つことがあなたを本当に愛する道である」として、自らは今後身を引くことを告げた。

翌二月、純が谷町の蔑子の家にやってきて、二階で阿佐緒と同棲する。それを知った「アララギ」の幹部同人たちは、阿佐緒と別れるよう純を説得した。

茂吉は書いている。「私は平福百穂、島木赤彦二人の意見を持参し、君（筆者注：石原純）が麻布の三ヶ島蔑子さん方に阿佐緒さんと同居してゐるところに忠告に出掛けた。君は既に世界的の学者である。かけがへの無い人格である。一婦人のために方向を誤るとは何事ぞやといふのが平福・島木二人の意見であつた。私は忠告に一週間程日参した」。

千樫は阿佐緒と純を添わせようとし、他の同人たちは別れさせようとした。意見は真つ向から対立したはずだ。

千樫は純と阿佐緒の前途を祝福し、応援しようとした。しかし千樫の気持ちは報われなかった。

千樫の予想と違つて、阿佐緒の態度は煮えきらず、純を一途に求めるひたむきさは見られなかった。

半年後の大正十年七月十二日付けの阿佐緒宛の手紙（⑮）で、千樫は、内心では純夫婦の離婚を恐れている阿佐緒に、「あなたは本当のところどうしたいといふのですか。一人の安らかさにかへりたいといはれますが、衷心さうですか」と問い、一月

の手紙とは反対に、「別れられればその方がI氏（筆者注：石原純）の爲にも、あなたの爲にもよいやうに思ひます」と書いて、純と別れることを勧めている。

二週間後の七月二十六日から、東京朝日新聞、読売新聞などの各新聞で、阿佐緒、純の不倫恋愛が報道されはじめた。地元仙台の河北新報は、九月十四日から一年間、三百六十回にわたつて阿佐緒と純をモデルにした小説「蘭双紙」（巽そめ子作）を連載した。連載は翌年の大正十一年九月八日まで続いた。

報道内容はおおむね、世間知らずの学者が「妖婦」に誘惑されたという論調であつた。この報道により、二人の関係は「事件」として世間に知れわたつた。

結び

千樫は同人たちから阿佐緒の後押しをして純を誘惑させ、事件を引きおこしたと見なされた。しかし、実際は、千樫は阿佐緒と純をよりよく生きさせようと考え、善意から応援したのだった。

九十年近い歳月を経て、阿佐緒の評価は百八十度転換した。阿佐緒を形容することは「妖婦」から「人形」、「童女」、「少女」などへと変わり、今では阿佐緒は純の執拗な求愛に負けた被害者と考えられている。

だが、阿佐緒に宛てた千樫の書簡を見る限り、この評価は的を射ているとはいえない。

「合歓木の花」の題名に見られるように、阿佐緒は純に心を

傾けていた。純との関係において、阿佐緒は現在考えられているような一方的な被害者ではない。

千樫は大正十年七月十二日付けの手紙(⑮)で、阿佐緒に、「一方に拒絶しつつ一方に好意を見せながらちらしつつ進むのはよくなし」と忠告している。

阿佐緒がどこまで自分の行動に自覚的であったかは謎だが、阿佐緒は一方で純に「世話女房のやう」な態度をとりながら、一方で「一人の安らかさにかへりたい」と言っていたようだ。

同じ「アララギ」同人で、新聞記者もしていた山田邦子(今井邦子)は阿佐緒について、「性格がずるぶん複雑で御自分で統一しきれない事が有らうと思はれます」(傍点筆者)と書いている。邦子が指摘するのは、阿佐緒のこのような性格ではないだろうか。^(注15)

邦子がいのように、自身でも統一しきれないような複雑な性格だとすれば、千樫や霞子などのような理解者でも、阿佐緒の将来を見通したうえ助力するのは至難のわざだったにちがいない。

事件報道後、赤彦等は、純には「被害者」として同情を寄せるとともに、「事件」を引きおこした責任を追及して、霞子と千樫を排除していった。

霞子は婦人雑誌「新家庭」に「事実を闡明す」、「生けるものの悲しみ」の二編の文章を発表して釈明する^(注16)。しかし、立場の弱い女性だったから、赤彦からの一片の書状で切りすてられた。霞子と違い、師伊藤左千夫の愛弟子で、『アララギ』の幹部同人だった千樫はそうはゆかない。

大正十三年四月、千樫は『アララギ』同人でありながら、赤彦たちに無断で文芸誌「日光」の創刊にかかわった。この機をとらえ、赤彦は千樫に絶縁を宣告した。二年後の大正十五年、赤彦は病没する。

千樫の絶縁は『アララギ』同人たちにとって諸刃の刃となった。昭和二年、赤彦の後継者藤沢古実^(注17)は、モデルの女性との駆け落ちが新聞種になり、『アララギ』を追われる。古実はかつて千樫を追った「発行所側」の中心人物だった。古実の追放は、赤彦の時代の終わりを意味した。

(注1)『折口信夫全集廿六卷』(昭和五十一年六月十日、中央公論社)「自歌自註 大正十二、十三年」。釋道空(折口信夫)は、大正十二年、関東大震災の騒ぎが収まったあと國學院大学で宿直をしていたら、昼に千樫が訪ねてきて、『アララギ』とうとくなつたわけを話したという。

(注2)筆者が目を通したのは橋本徳寿『アララギ交遊編年考三』(昭和五十九年十月、至芸出版社)所収の十通、大林昭雄編『宮城文学資料』(平成九年八月、ギャラリー大林)所収の一通、原阿佐緒記念館(宮城県大和町八坊原宮床)所蔵の四通である。封筒に押された「扇」の印は、晩年の阿佐緒に尽力した宮城の歌人扇畑利枝の所蔵印であろう。『アララギ交遊編年考三』は、以下、『編年考』と記す。全十五通の日付けはつぎの通り。

① 大正九年六月十一日 青山南町の古泉千樫から宮床村の原阿佐緒宛て封書。『編年考』所収。

五月、阿佐緒が千樫に出した見舞いの手紙への礼状。この年の四月、千樫は南青山の、自宅近くの銭湯の板間ですべり、左手に大けがを負った。

- ② 大正九年六月二十四日 青山南町の古泉千樫から麻布谷町三ヶ島葎子方の原阿佐緒宛て封書。『編年考』所収。千樫は阿佐緒に「なほ御滞在でしたら一寸御目にかかりたい」と書いているが、このとき阿佐緒はすでに帰国しており、会えなかったようだ。

- ③ 大正九年六月二十八日 南青山の古泉千樫から宮床村の原阿佐緒宛て封書（未発表。原阿佐緒記念館所蔵。封筒に「扇所蔵印あり」）。①への返信が、二週間以上経っても来なかったため、怒じて書いた封書。相聞歌一首「都べに居れば寂しも山に水にあそべばまして思ほゆらくに」が見える。

- ④ 大正九年九月二十五日 宮床村の原阿佐緒宛絵ハガキ（差し出し人の名前は無いが筆跡は千樫）。『編年考』所収。

- ⑤ 大正九年九月二十五日 宮床村の原阿佐緒宛絵ハガキ（差し出し人の名前は無いが筆跡は千樫）。『編年考』所収。

- ⑥ 大正九年十一月十四日 青山南町の古泉千樫から、麻布谷町三ヶ島葎子、原阿佐緒宛てハガキ。『編年考』所収。

- ⑦ 大正九年十一月十六日 青山南町の古泉千樫から、麻布区谷町の三ヶ島葎子、原阿佐緒宛て封書（未発表。原阿佐緒記念館所蔵。封筒に「扇所蔵印あり」）。阿佐緒に「左千夫全集の校正をお願い」したことを、葎子に報告している。千樫はこの件をおそらく十四日の訪問時に切りだしたのであろう。

- ⑧ 大正九年十一月二十三日 麻布谷町倉片方の原阿佐緒宛絵ハガキ（差し出し人の名前は見えないが筆跡は千樫）。『編年考』所収。手賀沼縁の丘陵を散策する道すがら出したハガキ。「この丘のみちはつきたり来し方に歩みをかへすわれならなくに」他連作「沼」の三首が見える。

- ⑨ 大正九年十一月二十三日 千葉県布佐町の千樫から麻布谷町の三ヶ島葎子、原阿佐緒宛て絵ハガキ。『編年考』所収。
⑩ 大正九年十二月十日（推定）南青山の千樫から麻布の三ヶ島葎子、原阿佐緒宛てハガキ。『編年考』所収。左千夫全集の校正に対する礼状。

- ⑪ 大正九年十二月十二日 青山の千樫から麻布三ヶ島葎子方の原阿佐緒宛てハガキ。『編年考』所収。

- ⑫ 大正九年十二月十三日 青山の千樫から、麻布三ヶ島葎子方の原阿佐緒宛て封書。『編年考』所収。「年久にたえにし人にしばしばいまはあひぬ嘆きはやめぬ」の歌が見える。

- ⑬ 大正十年一月十九日 青山南町の古泉幾太郎から麻布区谷町三ヶ島葎子方の原阿佐緒宛て封書（未発表。原阿佐緒記念館所蔵。封筒に「扇所蔵印あり」）。

- ⑭ 大正十年一月二十三日 古泉千樫より原阿佐緒宛て封書（未発表。原阿佐緒記念館所蔵。封筒に「扇所蔵印あり」）。
⑮ 大正十年七月十二日 古泉千樫より原阿佐緒宛て封書。大林昭雄編『宮城文学資料』（平成九年八月、ギャラリー大林）所収。現在仙台文学館所蔵。封筒なし。

（注3）連作の名は橋本徳壽、安田稔郎『定本古泉千樫全歌集』（昭

和三十七年二月十一日、石川書房)による。なお、連作の初出はつぎの通り。「独り寝」(大正三年。『地上巡礼』)、「波の音」(同四年。『近代思潮』「稲毛」)、「島の桃」(同五年。『中央文学』)、「朴の花」(同六年。『珊瑚礁』)、「朴の芽」(同七年。『珊瑚礁』)。

(注4)「婦人公論」第六年第十一号「恋愛の破産 秋季特別号」東花夫「三角関係の一頂角から」。東花夫は、真山孝治の仮名。「蒼蠅い人目」を避け、煩はしい訪客を外らす為に、私達(筆者注：真山と阿佐緒)は一夜泊りのシヨウト・トリップに出るのでした。夜の七時頃から朝の八時頃迄を、愛の陶醉に浸るために、汽車に乗りました。仙台の街端には、静に恋を語り明かすに適はしい、小駅が沢山揃って居ります。岩沼、塩竈、福島、松島と。汽車を棄てて、名も知られぬ宿屋の一室に、只二人対座した時、初めて安心した気分に戻った時、毎時も最初に、二人の口から漏れる言葉は恠うでした。「御気の毒ですね。先生(筆者注：石原純)は留守の宿に又ポツネンと只一人、帰らぬ吾々を待つてゐるでしょう」。

(注5)村山磐「恋の顛末 石原純と原阿佐緒」(平成九年六月二十五日、耕風社)「石原純略年譜」による。(注4)「三角関係の一頂角から」で、東花夫(真山孝治)はこの自殺未遂に触れている。この一文によると、自殺未遂について阿佐緒から聞かされたのは「去年(筆者注：大正九年)の冬も未だ雪を見せない」時期であつた。そして真山の提案により、一週間後阿佐緒は上京することになったという。これが事実なら、阿佐緒の上京は十月二十一日だから、純が自殺未遂事件を起

こしたのは大正九年の十月中旬頃ということになる。

(注6) (注2) 前掲書『アララギ交遊編年考三』所収。

(注7) 古泉幾太郎(千樫)編『左千夫全集三卷』「小説及小品」(大正十年一月、春陽堂)あるいは同全集四卷「分家」(大正十年四月)の校正であろう。

(注8) (注2) ⑧のハガキには連作「沼」(全十九首)中の三首が見える。千樫は十一月二十三日手賀沼へ行っている。

(注9) 上田三四二「鑑賞古泉千樫の秀歌」(昭和五十一年七月十五日、短歌新聞社)、『日本の詩歌六』(昭和五十一年四月十日、中央公論社)柴生田稔による「古泉千樫」『青牛集』注。(注2) ⑧のハガキには「霞が浦は今の自分には広く明るすぎるやうな気がするのでこつち(筆者注：手賀沼)へ来た」とある。千樫の鬱屈した気持ちにじみでている。

(注10) 倉片みなみ『定本三ヶ島腹子全歌集』(平成五年三月二十六日、短歌新聞社)所収。

(注11) 大林昭雄『原阿佐緒人の巻友の歌』(平成十六年八月、ギャラリー大林)。(注10) 前掲書『定本三ヶ島腹子全歌集』。

(注12) 第三歌集「死をみつめて」(大正十年十月三日、玄文社詩歌部)「歌集を出版するに就て」に、「今年の三四月頃から歌集を出すつもりで、私の暇々に原稿など書きと、のへてゐたのでした(中略)その頃の私は、その歌集に(合歓木の花)と名づけようと考へたりしてゐました、けれど今の私の心はさう云ふやさしい題名とはまるでふさはないやうになつてしまひました」とある。千樫の書簡から、実際にはもっと早く一月から出版を計画していたことが伺える。

〔注13〕『斎藤茂吉全集』七巻昭和五十年六月十八日「茂吉小話」中の「石原純博士」。

〔注14〕「短歌」(三十五の九、昭和六十三年九月)「原阿佐緒生誕百年記念号」所収「恋のかたみ 阿佐緒の出發」で、尾崎佐永子は阿佐緒のイメージを、なよなよとして「瞳いっぱい涙をためているような生きた人形」と形容している。同誌には、永畑道子の「明治を曳きずった少女」も収められている。永畑は、阿佐緒を古い明治期の価値観を背負った令嬢と位置づける。また、大原富枝は、阿佐緒の評伝「慘憺たる童女」(『群像』五十の四、平成七年四月号)で童女のように天真爛漫な阿佐緒像を描いている。いずれも、「妖婦」とは正反対のイメージである。

〔注15〕『新家庭』(第六巻九号・大正十年九月一日)「私見」山田邦子。山田邦子は赤彦の門人。後の今井邦子。

〔注16〕大正十年八月二十三日、赤彦が平福百穂へ宛てた封書(『赤彦全集八』昭和五年十月十五日・岩波書店)に「古泉君新家」といふ雑誌に一頁半位意見発表と話し候ゆゑ是は原稿撤回を勧め置き候へ共如何かと存候」とある。千樫は蔑子とともに不倫事件のいきさつを語ろうとしていたが、赤彦にとめられ中止したことがわかる。

〔注17〕杉浦翠子『純愛三十年斎藤茂吉の手紙』(昭和二十九年、折口書店)。大正後期の『アララギ』は各々師事する人が違っていた。赤彦の弟子たちが最大の勢力で『アララギ』の発行事務をとりしきっていたので、俗に「発行所側」と呼ばれていた。

資料「原阿佐緒宛古泉千樫未発表書簡」

つぎに紹介するのは、(注2)に掲げた書簡十五通のうち、⑬、⑭、⑮の三通である。⑮は『宮城文学資料』ですでに公刊されているが、同書では、実際は一通の手紙が二通の手紙として掲載されているため、文意がとれなくなっている。そこで、順序を改めた上、全文収録した。

⑬「麻布区谷町五十 三ヶ島氏方 原阿佐緒様 御直披」「青山南町六ノ一〇八 古泉幾太郎 一月十九日」

御らんの上は直ちに打ち破りお捨て可被下事

容易になし得られないと思はれる私共二人はかの旅を折角しながら帰りにあんなことになつたのをすまないと思ひます。自分でも遺憾に思ひます。

その夜谷町を出てから家へ帰りつくまで道々本当に考へさせられました。只私は苦しくさうして自分のお人よしが癪にさはつて困つたのです。あの時は始めからあなたに対する不信とかいやな思ひとかはそれほど思ひませんでした。人間の直覚といふものは大抵の場合本当だらうと思ひます。私も自分の直覚を信頼して多く間違はなかつた。それなのにあなたに対する時は、あまいのろまな考へをおこして自分の直覚をほかしたり打ち消したりして来たことが多いやうに思ひます。

さうして自分勝手に都合合いうぬばねな考への方に引きつけて解釈してあとで一人で癪にさはるのです。だから自分自身に対しておこつたり憤慨したりするのです。

あなたが今になつてもよい、あなたの口から本当のことをいつてくれたことを寧ろ感謝すべきであつたのだと思ひます。

あなたが既にさうであつたのなら一層私としては今のあなたに同情しあやまらなければならなかつたのです。

それをあんなに興奮して怒つたやうな顔を見せてしまつたことは私の悪い癖です、すまない訳です。

私はあなたの寂しいとおっしゃる今のあなたの心持に少しでも力を添へることが出来ればよいと思ひながら、いつか私自身があなたを非常に苦しめてゐたやうに思はれて余計に悲しかつたのです。本当に僕は我儘者です。勝手な利己的な人間です。あなたに何ものぞまなひと思ひながらいつかあなたにあなたの全部をのぞむやうな考へまで起してゐたのです。或は今のうちだけは全部を自分のものにしてしまつてゐるやうな考へを知らず知らず持つてゐたのかも知れません。

そんな無理な考へを持つてゐたのでせう。

あなたが既にさうであつたことは当然のこととせう。それを告白してくれたからつて僕がいやな思ひをするのはしかあなたを苦しめたのは僕のさもしい心のせゐでせう。

よしあなたが□□□□移つて落付きを得るまでの寂しさをまぎらかす道具の一つで私があつたとしてもかまひません。つまりあなたの本心から僕を愛し僕に何等求むところなどなくて、ほんの一次的つなぎの役であつたとしてもよいのです。寂しい時のひまつぶしに馬鹿話や下らぬ遊びをするのみの相手であつたとしてもよいのです。

あなたが「京人形を我抱きて」といふお歌を送つてくれた事も、

歌集を「合歡の花」としたのも、その時すぐに直覺した通り今はつきりわかりました。私はただあなたの方の合歡をお祝ひすればよかつたのでせう。

今私は漸くかうして一人でゐれば落付いてゐられるやうになりました。さうしてあなたを静かに思ふことも出来るやうになりました。ただお目にかかるのはなほ一兩日の後にしたいと思つてゐます。又少しでもあなたをうさげさせ苦しめるやうな心になるといけないと思ひますから。

とに角僕は静かな心になることが出来た。

この後も今までのやうにあなたに對することが出来得ると信じます。あなたが今までのやうであつた方がよいと思はれるのならば、私はいつでもお訪ねいたしませう。出来るだけの事は何でもいたしませう。

こんなことを書いたのをおこらないで下さい。

こんな疑つてゐるやうなことを言ふとやはり自分で寂しい氣がします。私たちはもつと信じ合つて行ける筈だと思ひます。でもお人好しな自分は今更にあなたの本当の心を知りたいやうな氣がしてゐます。

本当に信じあひ、愛しあふことが出来れば出来るほど、二人には寂しい苦しいことが多くなるかも知れないのです。さういふどうにもならぬ境遇に腹立つて、弱い私は堪へ忍ぶことが出来ないで、つまらぬことからあなたをいちめるやうなことがありはせぬかと、それを恐れてゐます。そんなことうるさくて困るといふならお目にかからぬことにしてもよい。いくら寂しくても堪へませう。その方があなたの幸福だとあなたが信ずるなら

ば死ぬほど苦しくともさうしませう。技巧的な言葉でなしに正直にあなたの心持をいつて下さい。

今よし子さんに手紙を出しました。^{*}けれどもあなたに出さなかつた。出せなかつたのです。これも怒らないで下さい。この手紙はお手渡しいたします。一月十九日夜 古泉生

阿佐緒様

*この手紙は倉片みなみ『三ヶ島霞子往復書簡抄』に収められている。

⑭「原阿佐緒様 御直」「古泉千樫 一月二十三日」

あなたが心を素直に聴くして此手紙を迎ふ思ふ万分の一をも書きえないだらうと思はれる此手紙を読んでくれるやうに希望する。私は私の愛が却てあなたを困らせ苦しませるやうになりはせぬを恐れる。それで此手紙を書く。

学者として人格者として最も尊敬するに足る石原氏に命をかけて愛されたあなたは所謂選ばれたものの悲しみと寂しみとさうしてよろこびと誇りとをしみじみと感じてゐるに違ひない。それは私にはよく察しられる。石原氏の愛を受け入れたあなたは今その悲しみと誇りとをひとり保つて行かねばならない。それは尊いことである。石原氏が今まで限りなく苦しんだことにあなたが報いる道更に此後石原氏をよく生きさせあなた自身をよく生きさせる道をあなたが此心をよく保つてゆくより外には無いといふことを私は考へる。

人間は弱いものである。あなたはよく誰の言葉をも信じないと

いつた。然かもあなたは常に何物かに信頼しないではゐられないやうな心でこれまでゐたと思ふ。それがやつぱり弱い証拠だ。然し今あなたは石原氏の心だけを信じられるといふ。そこで、そこを本当に考へてその信じ得るといふ心を少しでもぐらつかせないやうにして固くひたすらに抱き守つて行かねばならない。私などがこのごろのやうに余りにしばしばあなたに相見ることにはあなたの心を、あなたが今心から寂しさを味ひよき道に進まうとするのをいいかげんにごまかしてなまぬるいものにしてしまひはせぬかと思はれるのみである。石原氏の強い愛と大きな力とは今にあなたを、少しでもぐらついてゐるあなたの心を全くひたぶるなものにしてあなたを人間として本当によく生きさせるであらう。どんなことがあつてもさうさせるに違ひない。

あなたの心もさうなるであらう。けれどもさうなる心を聊かでも邪魔して途中に迷はせるやうなことがあつてはあなた方にすまない。男女の關係は狂ひを生じ易いものである。それは石原氏とあなたと私（私以外の第三者でもさうだ）とのことについてよく考へねばならない。

それに愛は奪ふといふことも一面の真理である。私はあなたに何も望まないといつてゐながらいつの間にかあなたのすべてを望むやうな心になるかもなつてゐたかもしれない。つまりあなたを最も苦しませるやうな道をとつてゐたかもしれない。今後これまでのやうに余りにしばしば相逢ふことはますますさうさせるばかりのやうに思はれる。私はそれを恐れる。

それで私はこれからはなるべくお目にかかることを控へるやうにしたいと思ふ。さうすることは私に非常に苦しく寂しい。け

れども私はどうにかしてそれを堪へて行かうと思ふ。

私の心が變つたのでは決してない。

十年近い間一日も一夜も見ないことのなかつた私の夢が今醒めたのではない。私たちの立場が、殊にあなたの行くべき道が今はつきりとわかつたやうに思はれるから、私は折角しばしば相見ることの出来るやうになつたみづからのよるこびと幸福とを捨てやう抑へて行かうとするのである。

私はこれまでのすべての事を（そこに責任があればどんな責任でも）のがれようとするのでは断じてない。

私は私の心からせずにゐられない時はたとへどんな歌をつくることをも恐れるものではない。それだけ私は恐れるのである。

あなたを思ひやる心が余りに深くなつてゐるからである。

あなたは当分とにかく寂しいかもしれない。然し堪へて下さい。あなたは此手紙を見ておこるかもしれない。おこつてもよいから強くなつて下さい。

あなたは既にあなたが最も愛する人を捨てた（筆者注：阿佐緒が純を選び、真山孝治と別れたことを指す）捨てたといふことがわるいなら失うた。失ふことに堪へて一つの道を進んだ。私などのことは、あなたが其つもりにさへなつてくれれば何でもないことであらうと思はれる。

強く生きて下さい。選ばれた人その悲しみとよるこびとを一人深く味ひつつ強く深く進んで下さい。あなたが人として芸術家として深くよくなつて行く道はこの一筋であることを考へて下さい。私は今までのやうなたわいのないだらしない私たちの關係を断つことが、あなたを本当に愛する道であることを信ず

る。

どうか誤解しないで、落付いて考へて下さい。私はあなたが私の心持を解つてもらへることを信じてゐる。

からだを丈夫にして下さい。

歌も勉強して下さい。今までの歌よりも一層深いよい歌を作つて下さい。私はあなたの歌が好きだからこのことをいふ。

最後にあなたが許してくれるならただふるき友人として同じ歌の道を歩いてゐる人間として特にアララギの同志としての一般的の交りだけをしてゆくことは何の差支もないことと思ふからそれを希望したいと思ふ。

私は先日から考へて此手紙を書いた。書きながらなほたまらぬ寂しさを感じつつあつたが、今私は今までのどの時よりも最も正しく深くあなたを愛してゐるものであることを信ずる。どう考へても人間は寂しいものであると思ふ。不悉

一月二十三日

千樫

阿佐緒様 御もと

⑮ 七月十二日付

二三日曇つて涼しかつたのが、天気晴れて又暑くなりました。おからだの具合如何にや御案じ申しあげます。小生昨日より十日間休暇です。風があるので暑いわりに凌ぎよし。

久しぶりで親鸞の歎異鈔を読んでいます。歎異鈔を読み始めて十七八年なります。始め五六年の間は、毎日必ず誦誦して居たのですが、此頃は久しく見なかつたのです。

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人

が為なりけり。さればそこばくの業を持ちける身にてありけるを、たすけんとおぼしたちける本願のかたじけなさよ。かうした言葉が今更のやうに見に沁みて感じられます。

本願といふのは此宇宙に溢れてゐる生命の力が、各自の個性の上に具象した姿ではないでせうか。本願力は即ち生命力ではないでせうか。この生命力の前には世の善悪などといふことは問題にならないと思ひます。

親鸞は「しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず。

念仏にまざるべき善なきゆゑに、悪をも恐るべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆゑに云々……」といはれてゐます。私共もこの生命力に随順して生きて行けばよいと思ひます。私は本願といふことを生命力と解して今更に新しい意義と力とを感じてゐます。あなたは説教されるのは大嫌ひでした。こんなことが説教にきこえたら私が悪いのです。

今日は私があなたに対して思つてゐたことに就て申しあげてしまひたいと思ひます。これもあなたを責めるとおとりになられては私の本意ではありません。兎に角不愉快でもしまひまで読んで下さい。

「あのかたがもし万一、解決が出来たとしても（絶対に出来ないといつてもいい、でせう）云々」（筆者注：「あの方」とは石原純を指す。「解決が出来た」とは妻との離婚の成立を指す）

といふやうなお言葉に關していひたいのです。四月I氏（筆者注：石原純）上京せられてより麻布に居られる筈のあなたの態度と温泉滞在中のことは直接に知らねばさておき、帰京後の態度、お二人にて方々へお出かけになり、世話女房のやうにして

居られた態度（これは私直接に知らねど、すべての人々が私にいふ処也）そちらに帰郷後ちきにあなたが電話にてI氏を呼び寄せ、数日滞在せしめたことなどから推して、あなたの今度私に手紙でいはれたやうなお言葉の本当の意味がわかりかねるのです。私はすべて率直にいひます。私は今あなたに対していさ、かでも責めるといふやうな考へでいふのではないから、あなたも落付いて読んで下さい。

あなたは本当のところどうしたいといふのですか。一人の安らかさにかへりたいといはれますが、衷心さうですか。さうとすれば、どれだけの覚悟を以てさう思ひますか。ただ一時の反感で、その方がいいんだが位のものではないのですか。ただ今迄のやうな位置に置かれる不満に堪へかねる一時的のお言葉ではないのですか。あなたは解決を急がせるためではないといはれたが、本当にさうでせうか。余程しつかり考へねばなるまいと思ひます。あなたは過去数年の間、拒絶して来た事がどんな結果になつたかは、あなたが最も好く知つて居る筈だ。あなた方の關係があれまになつた事に就て、多くの人は（あなたは自分に責任は大部分はないといはれても、其結果は）あなたがここまでおいでといふやうにぢらしつ、引きずり来たものだ。少くとも其結果から見てさうも見られるといふやうに見てゐると思ひます。

世間の人が何と思はうともそれは勝手だといへば無論私もそれには同感するものですけれども、これは世間を對手の問題ではありません。過去に於てさうした結果が、対者の心をますます強めたやうに今後もさうなるべきだと思ふのは無理ではない。

さうすればこれはあなた自身第一に考へねばならぬ問題です。

あなたはⅠ氏が早く解決して同棲する事を望むならばそれでもよいでせうが、それでも本当にさうだとするならばさういうやうに裏から出ずに真正面からⅠ氏に迫る方がよいと思ひます。

どこまでも徹底して進んで行く方がよいと思ひます。あなたを知つてゐるすべての人から却て同情もされると思ひます。

私はこの手紙を書くのに随分躊躇してゐた。それに私はあなたがたがやつぱり別れてしまふ方が自然であるやうに思ふ。よいやうに思ふからです。然し私の立場としてあなたが誰のものにもならず自由な位置に一人であることを私の勝手な我儘から、私は望んでゐるものではないかと思つたからです。さうした嫉妬的感情からさう思つてゐるのだと私はあなた方に何も申しあげる資格がないと思つたからです。とにかくいろいろ考へて見て、先づあなたの考へをしつかり定めてからやつて貰ひたい。さうしてそのお考へを正直にきかせて貰へばよいと思つたのです。

Ⅰ氏に始終手紙をかいてゐたあなた、さうして、あなたの御病中、私が訪ねた時のあなたのⅠ氏に対する態度、又その後のことなどから考へて、どうもあなたのお言葉がはつきりわからないのです。

今私は虚心に私として出来るだけ虚心に考へて見て、別られ、ばその方がⅠ氏の為にも、あなたの為にもよいやうには思ひます。さうすれば今迄の世間の誤解、又は悪い評判もなくなるやうに思ひます。

世間様の物言では此際いひたくはない。只あなたとして徹底

した行動をとつて貰ひたいと思ひます。どちらでもよいからさうして貰ひたい。自分がよい子になりたい。自分は悪いのではないといふやうな曖昧なことは一番いけないと思ひます。

別れやうとするなら本当に大覚悟が必要です。あなたにその力があるでせうか。一方に拒絶しつ、一方に好意を見せながらしつ、進むのはよくなし。

あなたにこんなことをいつたら、おこるかも知れない。本当におこるならおこつて下さい。ただよく考へて徹底的にあなたの本能の生命力に随順して進んで下さい。おこつたやうな様子をして、本当の感情をごまかすのはいけない。

いろいろ失礼な言葉を申しあげましたことをおわびします。

暑氣くれぐれもおいとひなされ 匆々

七月十二日

古泉生

阿佐緒様

(せんの あすか・文学部教授)

脱稿後、本稿で用いた『アララギ交遊編年考三』収録の阿佐緒宛千樫書簡は、同じものが倉片みなみ『三ヶ島霞子往復書簡抄』(昭和五十五年、至芸出版社)にも収録されていることに気がついた。同書には、『アララギ交遊編年考三』に見えない阿佐緒宛千樫書簡が二通含まれている。①大正十年一月九日アララギ発行所の千樫等から麻布の霞子、阿佐緒宛ハガキ。②同年一月十三日(?)片瀬江ノ島の千樫、達三から麻布の阿佐緒宛絵ハガキ。